

平成 24 年度 第 3 回 JICA 自然災害からの事前復興計画研修
- JICA Pre-Disaster Recovery Planning From Natural Disasters -



(最終日JICA関西にて)

技術研修期間：平成 25 年 1 月 15 日～3 月 1 日（7 週間）

研 修 場 所：神戸市/小千谷市・長岡市（新潟県）/東京都/宮古市・大槌町（岩手県）/
仙台市・名取市（宮城県）

研 修 内 容：神戸における阪神・淡路大震災後の復興プロセス・ノウハウを学ぶ講義/視察

参加研修員：8ヶ国 14 名（バングラデシュ 2、中国 2、フィジー 3、モルディブ 1、ペルー 1、
フィリピン 1、トルコ 2、メキシコ 2）

当財団では、独立行政法人国際協力機構(JICA)からの委託を受け、「自然災害からの事前復興計画」研修を公益財団法人神戸都市問題研究所・本荘常務理事の指導のもと実施しました。本年度は自国で災害復興計画策定に携わる中央ならびに地方政府の行政官を 8 か国から迎え、昨年度の研修期間より 1 週間長い 7 週間の研修を行いました。研修の修了前には神戸市長を表敬訪問し、市長から長期の研修に対するねぎらいと励ましの言葉をいただきました。

研修を通じて研修員は、阪神・淡路大震災からの復興に向けた「神戸市復興計画」の策定や推進など、市の取り組みについて幅広く学びました。分野別では、上水道や神戸港などの復旧・復興や、住宅再建、復興都市計画、経済復興、生活再建などを学びました。また、計画の策定・実施においては、行政と地域住民・事業者との協働によって取り組んだことを学びました。さらに、協働によるまちづくりの推進力となった地域における人と人とのつながり・絆の重要性を説いた「ソーシャルキャピタル」の概念や、その具体的な取り組みについても学びました。復興の取り組みの基本的な考え方については学識経験者の方々に講義していただくとともに、実践にかかわる内容については、震災後に復興に携わった神戸市職員や、地域住民の方々などを講師として迎え、経験に基づいた具体的なお話しをしていただきました。

一方で、昨年度訪問した小千谷市・長岡市（新潟県）・東京、東日本大震災の被災地である仙台市・名取市（宮城県）に加え、宮古市・大槌町（岩手県）も訪問しました。視察先では、復興計画の行政担当者、復興にかかわった NPO、復興に取り組んでいらっしゃる地域住民代表者、さらには阪神・淡路大震災当時の国の幹部の方々から説明を受けました。視察を通じて、研修員は神戸市の被災や復興の取り組みの特長を理解したようです。



～研修を振り返って～

近年、世界各地でマグニチュード 7 を超える地震が頻繁に発生しており、地球は地震の活動期に入ったと言われています。研修中にも、ソロモン諸島近海でマグニチュード 8 の地震が発生し

ました。幸い津波はなく、その近傍にある国のフィジーから参加した研修員は研修を継続することができました。現在、東日本大震災からの復興に注力している日本でも、南海・東南海地震が2030年ごろに発生する確率が高まっています。これまで5回にわたり行われてきました本研修は今年度で終了しますが、その一方で、復興や防災・減災の取り組みについて、ますます世界中の関心は高まっています。

研修前半では、震災の応急対応、復興計画の策定・実行過程について学びました。研修のプログラムにはありませんでしたが、研修員の有志は、「阪神・淡路大震災 1.17 のつどい」追悼式典に参加して、竹灯籠に火を灯し、献花台に花を供え、犠牲者への祈りをささげました。阪神・淡路大震災から18年もの月日が経過し、今では震災の傷跡がほとんど見られない神戸の街並みですが、このつどいに早朝から参加していらっしゃる多くの市民の方々を見て、神戸で起こった大震災によってもたらされた甚大な被害について研修員たちは改めて実感したようでした。



(1.17のつどい)

研修中盤以降は、地域住民・事業者・NPOなどが復興に大きな役割を果たしたことについても学びました。その意義について講義を受けるとともに、行政と個々のNPOの間をつなぐ中間支援組織、まちづくり協議会、防災福祉コミュニティなど、神戸の復興や安全安心のまちづくりにおいて大きな役割を担ってきた団体を視察しました。六甲道の公園管理組合の役員である地域住民の方々が、震災後の再開発についてご自身のお考えを堂々と述べる姿や、防災福祉コミュニティで一般市民であるメンバーや防災士の方々が地域住民に啓発活動を行う姿を見て、研修員はたいへん感銘を受けたようです。研修員の国では、地域住民に災害への対応を担ってもらうことの必要性について伝えること、地域の再開発やそれに伴う集団移転について理解を得ることが非常に難しく、また制度等の国事情の違いもあり、神戸市のように行政の施策に住民が積極的に関わる姿を見ることはほとんどないそうです。研修員は神戸のまちづくりに対して住民のみなさまが主体的に参加しておられることについて自国に紹介し、普及させるため、活発に質問を行っていました。



(防コミでのハザードマップ作り)

本研修では、研修員たちが受動的に講義を受けるだけでなく、主体的に研修に取り組んでもらえるよう工夫しました。1月21日に行われた『第6回災害対策セミナーin神戸』では研修員による自国の災害について発表を行いました。また、研修員自ら考え、ともに学ぶための研修手法としてワークショップを採用し、研修期間中に5回行いました。研修中盤以降では、本研修の集大成として、将来自国で発生が想定される災害に備えるための事前復興計画の作成に取り組みました。最終日に行われた各国の事前復興計画の発表内容はいずれも研修の成果を反映した素晴らしいもので、実践を意識したより詳細で充実したものでした。



(ワークショップの様子)

今回の研修では、経験・教訓を伝えていくことの大切さについて実感しました。例えば、今の碧々とした六甲山があるのは、先人の方々が六甲山の緑化に取り組んできた成果です。研修員の中に、特に六甲山の歴史と現在の姿に感動したものがおりました。トルコからの研修員でしたが、

母国でも山の緑化の呼びかけを行うが、緑化が可能なことをまったく信じてくれず、緑化の取り組みに関わろうとする一般市民がいないのが彼の悩みでした。しかし、六甲山という成功事例を見て、緑化は可能であるという自分の考えの正しさを確信し、帰国してから六甲山での取り組みを伝えると意気込んでいました。同じように、現在の美しい神戸の街並みを見る限りでは、震災後に神戸に生まれた人や訪れた人が18年前の大惨事を思い浮かべることは、ほぼ不可能に近いのではないかと思います。それは喜ばしいことではありますが、同時に教訓を次の災害への対応に生かすという観点からすれば恐ろしいことでもあります。震災時や復興過程の教訓を風化させてはいけないと感じます。今回でもって6年にわたり実施してきた本研修は終了しますが、阪神・淡路大震災からの復興過程で学んだ私たちの経験・教訓を次世代や国内外に広く伝え、一人でも多くの方に学んでいただくことによって、世界の被災地の迅速な復興に貢献するために、将来、同様の趣旨の研修が実施されることを強く願います。

最後になりましたが、本研修を行うにあたってご尽力いただいた同志社大学の立木教授をはじめ講師の方々に改めて厚くお礼申し上げます。特に、視察先の岩手県・宮城県においては、それぞれ復興の実務でお忙しくされているにもかかわらず、震災後の被害状況や復興計画を説明いただきました関係者の皆様に、心より感謝申し上げますとともに、一日も早い復興をお祈りいたします。



研修担当：山田 かおり

委託元機関：独立行政法人国際協力機構(JICA)関西国際センター

研修指導者：公益財団法人神戸都市問題研究所 常務理事 本荘雄一

講義/視察先：神戸大学/政策研究大学院大学/兵庫県立大学/同志社大学/舞子高等学校

神戸市水道局/神戸市保健福祉局/神戸沖整備事務所/神戸市産業振興局/神戸市都市計画総局/神戸すまいまちづくり公社/神戸市危機管理室/神戸市消防局/長岡市地域振興戦略部/宮古市産業振興部/宮古市観光局/大槌町地域整備部/仙台市震災復興本部/名取市復興部/神戸防災技術者の会(K-TEC)/神戸港振興協会/すまいるネット/(財)建設工学研究所/(社)中越防災安全推進機構/わかとち未来会議(新潟県小千谷市)/六甲道駅北地区まちづくり連合協議会/六甲道駅南地区まちづくり連合協議会/旧居留地連絡協議会/神戸高津橋ふれあいのまちづくり協議会/野田北ふるさとネット/コミュニティ・サポートセンター神戸/たかとりコミュニティセンター

関西電力(株)/(株)OM こうべ/まちづくり株式会社コー・プラン/新長田まちづくり(株)/(株)地域問題研究所

【順不同、敬称略】





～研修員の声『神戸を訪れて（要約）』～
Participant's Voice 『VISIT TO KOBE』



国名：フィリピン

名前：Mr. PANGANIBAN Isaias Jr. Mendoza

所属：パンパンガ州グアグア市 防災・災害対策事務所



From Uaua to Kobe (simply mean I came from a River Port and end up in the Ocean Port... of Kobe)

The place where I came from which is existing for more than a four-century is a port, known in our place as the mouth of a river. As periods and reigns unfolded, names ascribed to this settlement changed as character of our people evolved as in preparation for the test of their spirit caused by threats of disasters in the passing of time.

This new experience of finding another port in this side of continent evoked unspeakable feelings beyond belief. A revisit of the past, a spirit ready to be shaken once again by the looming uncertainties of the future versus choices now offered by modern -minds only to be affronted again by risks of various proportions.

Culture & Catastrophe

The natural geography of Kobe makes an opportune position to be the economic nucleus of its surrounding suburbs. It provided opportunities for its people to become cooperative while asserting self- help in achieving greater common goals. The past inundations of natural and man-made adversities particularly the Great Hanshin earthquake never left Kobe lingering for long in the dark. It is a sweet parallelism to note that while the robust people of Kobe commemorated the city's recovery from the 1995 quake by holding an event every December called the Luminarie portrayed through illuminations of metal archways, on the same month, we lit our holiday lanterns to signify our unceasing hope for a safe environment after the debacles of our very own Mt. Pinatubo eruptions in 1991. An act of embracing the effects of catastrophes while emancipating the fears besetting our culture.

Of staggering steel and hoping hearts

While we are constantly confronted with the issues of disaster risks management and unyieldingly stood our ground in search for more solutions to the compounding effects of climate change notwithstanding the limitations of modern technology in providing alternatives to face the challenge of the ever-changing nature of threats, this Kobe experience let us feel and test that the restrictions of the impossibilities could be studied and planned with eagle's eye while drawing inspirations from the hope that lies in every heart and who believe this could happen. The effects may be irreversible but our hearts cling on high, it is possible.

【母国から神戸へ】

400年以上の歴史がある私の故郷は、港で、「川の口」という名前です。時代と支配者がかわり、過去に起きた災害の脅威で人々の精神が試されることに備える中で形成されてきた人々の特徴により、この地域は名前を変えてきました。

本研修で、もうひとつの港・神戸に来たことは、想像以上の言葉にできない様々な印象を呼び起こしました。

【文化とカタストロフィー（大災害）】

神戸は地形により、近隣の地方都市の経済的中心地となる絶好の地位を得ました。またその地形によって、人々はお互いに協力し合い、より大きな共通の目標を達成するために自助を肯定するようになりました。自然災害と人災が何度も起こり、特に阪神・淡路大震災の後でも、神戸が闇の中に長く留まるようなことはありませんでした。ここで、一つの心温まる偶然をご紹介します。毎年12月にルミナリエと呼ばれる復興記念行事を神戸の人々が行っています。時を同じくして、我が国フィリピンでも1991年におこった我々のピナツボ火山の噴火後から、安全な生活環境を願う想いをこめて、12月に灯籠を灯しています。これらの行事は我々の文化に影を落とす恐怖を解き放つ一方で、大災害がもたらす影響を受け止める機会となっています。

【驚くべき頑強な希望の心】

常に変化する自然の脅威に立ち向かうための手段を提供する現代科学に限界があります。しかし、災害リスクマネジメントの諸問題と気候変動による複雑な影響に対して、我々はより新しい解決策を常に求めています。今回の神戸での研修を通して、各市民の心にある希望と、実現が可能であると信じた人々からインスピレーションを得て、不可能だと思われたことについても鋭い観察力で調査され、計画策定がなされたことを我々は実感しました。災害がもたらした影響は巻き戻すことができません。しかし、我々の志を高く保つことは可能です。





国名：ペルー
名前：Mr. ALVAREZ GUTIERREZ Sergio Alex
所属：国立予測・防災・減災センター



For many years I am working in disaster areas (Hurricane Mitch 1998, 2001 and 2007 earthquakes in Peru, Hurricane Katrina 2005, Haiti earthquake 2010 among others) and teaching themes on Disaster Risk Management, and when I had talked with my colleagues of examples to follow in the world, we need to speak about the experience of Kobe Recovery as the example to follow. Now nearly two months in Japan, I have visited the prefectures of Iwate, Miyagi, Niigata and Kobe, now I understand about why Kobe is the example to follow. No doubt the first secret identified are humans living in Kobe, men and women, who daily show their feelings toward others, with words like "arigato gozaimasu" or "sumimasen" simple but high content human. The second secret has been building strong social relationships, based on experience and common goals of life, the same as they are expressed in the "Machizukuri" and "Bokomi" in Kobe. The third key aspect has been the commitment of the authorities to make Kobe the city that today I can say that has many charms. Kobe feels not only in commercial areas but rather in places where people come together to share. My stay in Kobe has awakened my senses again, new friends my desire to stay true to my commitment to life and new people I have met here have taught me that we need to continue looking at the future and its challenges with the desire to continue living.

I felt Kobe!

災害が発生した地域で私は長年働いており、災害対策について教えてもいます。世界中のどの国を手本にするべきかについて同僚と話していた際に、神戸の復興こそ私たちが見習うべきだという話になりました。研修も終盤にさしかかり、2ヶ月近く日本にいます。この研修で岩手県、宮城県、新潟県、そして神戸市を訪れたわけですが、なぜ神戸が見習うべき事例であるか分かりました。第一に、それは疑う余地もなく神戸に住んでいる人々にほかなりません。

「ありがとうございます。」「すみません。」などの言葉で、いつも周りの人に気持ちを伝えることは、シンプルではありますが、高い人間性を表していると思います。次に、神戸市における「まちづくり協議会」や「防災福祉コミュニティ」に代表されるように、経験と、共通の目標に基づいた強い社会的関係を構築していることです。3つ目は、たくさんの魅力のある神戸市をつくるために、神戸市の行政が強いコミットメントを持って取り組んでいることです。神戸の雰囲気は、商業地域だけではなく、むしろ人々が集う場所に表れていると思います。神戸に滞在したことで、私の五感はやみがえり、新しくできた友人、私の人生における目標に忠実でありたいという想い、私が神戸で出会った人々、これらを通して、生き続けたいという願望を持って将来とそこで待ち受ける様々な課題を見据える必要性を私に教えてくれました。

私は神戸にふれました！

